死なない政治家~転生した女の子は不幸に耐え抜きながらも、治安最悪の街を何とかしたい

あいく

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ギャング、ドラッグ、汚職、自然災害。貧困に苦しみ、まっとうに生きることすら難しい最低の街。ある種の地獄と化したこの街にも、希望はあるのか。

目次

アシェリー ―― 1
クソ家族 ―― 5
像 ―― 11

アシェリー

日の出の時刻。太陽が水平線から顔を出し、日光が辺りを照らす。暗闇によって、見えていなかった光景が太陽によって暴かれた。生まれた時から住んでいた我が家は、ボロボロになっていた。床は泥でまみれ、扉は蝶番を残して消失していた。

おぼつかない足取りで、家から出る。山の斜面に建てられた家はどれも泥にまみれていた。屋根のなくなった家もちらほらと見える。不自然に山肌が露出したところは、家ごと吹き飛ばされたことでできたものなのだろう。山のふもとでは、昨日まではなかった小さな湖が存在していた。

昨晩、大きな嵐が町を襲った。年々大きくなっていく嵐の中でも、一番大きな嵐だった。嵐は夜に私たちを襲い、街を破壊していった。巻き上げられた土や海水、木々が街中に落ち、家に突き刺さり、人を殺した。

唸るような暴風にかき消すことができないほどの、絶叫が一晩中鳴り響いていた。

おかしい、おかしい。なぜ、こんなに不幸な目に合うんだろう。私は、自分の半生を振り返りだした。

「あなたには、人生をやり直してもらいます」

真っ白な頭、マジックで描かれた立派な髭、全身タイツの変態。めっちゃくちゃイケボの変態が、急に話しかけてきた。

やばそうなおっさんなので、無視しようとしたが、勝手に口が開いた。

「嫌です。そして、きもいです」
「え、本当ですか。ありがとうございます。では、人生をやり直していただきます」
「勝手に話をすすめないでください。そして、臭いです」
「詳細ですか？　もちろん説明させてもらいます。簡単に言いますと、あなたは死んでいます。そして、私たちは、特に意味はありませんがあなたにもう一度人生を過ごして

ほしいのです。特に意味はありませんが」
「私死んでいるんですか？　いつ？　いつの間に？」
「今回のあなたの人生は、不慮の事故により老衰で死ぬことができませんでした。次回も、途中で死なれると、少々めんどくさいことが起きてしまいます」
「あれ……？　私って生きてたの？　何も思い出せない」
「そこで、あなたが絶対に途中で死ぬことがないように、多少のマジナイをかけました。人には過ぎた、不可思議なマジナイを」
「あれ、あれええ。　私って、私？　私って何？」
「ご安心ください。これで次回は老衰で死ねますよ。私たちも、たまにはいいことをしますね（ほっこり）」
「なんで体がないの？　腕は？　眼は？　なんで喋れ」
「それでは、生まれなおしていただきましょうか。心の準備はよろしいですか？」
「……」
「ああ、言い忘れていました。先ほども言った通り、あなたにかけられたマジナイは人に過ぎた代物です。その代償にあなたの記憶は消失しています」
「そして、死を自覚するのはやめておいたほうがよろしいですよ？　追いついてきてしまうので」

「心の準備ができた、って感じですかね？　よくわかんないですけど。じゃあ、転生させていただきますね」
「ごきげんよう」

「おぎゃあああああああああああああああああああああああああ」
「生まれましたよ、お父さん」
「おめでとう、お母さん」
「お猿さんみたい。でも、とっても可愛いわ」
「俺たちの子だ。なんて元気な子なんだ」
「名前はもう決めているわ。男の子なら、ブラウン。女の子なら、アシュリー」
「ああ、アシュリー。かわいいわが娘」
「幸せに生きれるように、神様にお祈りしましょう」
『ああ、美しき貴婦人よ。我が娘に、平穏な死アレ』

クソ家族

眼を開けると、知らない顔があった。

「おはよう、アシュリー。お目目パッチリ開かせて、いったいどうしたの？」
「なんでもない！　まぶたかっぴらいてみただけ！」
「かっぴらいたなんて言葉、どこで知ったのかしら。賢いのね」
「パパがおさかなシバイてるとこみてたら、うかんできたの！」
「シバくって言葉は？」
「いえからそとみてたら、オトコノコがボコられてたのみてたら、うかんできたの！」
「・・・あなたはとってもかわいいし、かしこいけれど。汚い言葉をあんまり覚えるのは感心しないわね」
「あ、あははは。おしっこー」
「水は流すのよー！」

あたりをきょろきょろと見まわして、トイレに入る。腰を下ろして、ため息を吐いた。

ああ、あぶない。ばれるところだった。私が、普通の子とは違うんだって。

生まれなおしてから、六年が経過した。大変だったなあ、この六年間。私が生まれなおしたこの国は、発展が遅れている国だった。水も水道から出る、電気もコンセントから出る。だが、安全がない。産業が進んでいない。警察は、地元のマフィアと仲良く共存する。国民の大半は、農業や産業で職を持つ。私の知識にあるような、大学に通っている人や、会社に勤める人は非常に少ない。

パアン！　銃声。思考から意識が浮かび上がる。まただ、最近は銃声が多い。どうやら、ギャングの抗争が起こっているらしい。

「大丈夫かー、アシェリー。ちびってないよな！」
「しね！　くそあにき！」
「せっかく心配してやってんのになー。やっぱかわいくねえな、お前」
「はやくドアからはなれろ！」
「音聞かれるの恥ずかしいのか？　別にどうでもいいだろ」
「バーカ！　バカにはわかんないんだよ！」

「六歳にバカって言われちゃあおしまいだな」

ゲラゲラ笑いながら、遠ざかっていたのが、くそ兄、サンゴ。私より十歳上のろくでなし野郎。彼女に振られたからって私で憂さ晴らししてくる、ノミみたいに器の小さい男だ。私は、前生きていた年を覚えていないが、絶対あいつより精神年齢は上だと思う。幼稚すぎる、馬鹿ガキ。絶対私のほうが大人。

「大きい声が聞こえたけど、大丈夫だった？」

「メイズおねえちゃん！　きいてよ！　あのバカあにきがさ！」

「あららら、大変だったね。サンゴには、デリカシーってものがないからね。恥って概念もないわ、だって、あの子のやってきたことすべて恥なんだから」

「いや、そこまではおもわないけど」

「やられたら徹底的にやり返すのよ。甘いわ、アシェリー。大体あなたね」

どういうわけかくどくどと説教し始めたのが、メイズお姉ちゃん。外見はおしとやか

に見えるけど、中身は口の悪いお局おばさんである。バカとおなじ年で、口調はあまり強くないが、バカみたいに気が強い。だけど、頼りになるお姉ちゃん。

なぜか泣くまでこっぴどく叱られた私は、勝手にトイレの扉をあけられて、メイズお姉ちゃんに優しく抱きしめられた。お姉ちゃん・・・ＤＶとか上手そうだね・・・。

「ごめんね、最近イライラしちゃって・・・。ほら、彼氏に振られちゃって・・・」

お前もかい！　と、泣かされた相手に言えるはずもなく、自分史上最高の笑顔で許した。

「うわ、何その顔。ピエロの真似するにはハロウィンまで遠いわよ」

「そうだよねー。とおいねー」

「アシェリー、ピエロの格好して、曲芸しながら物乞いしてみたら？　これってたぶん天性の才能だわ。絶対に儲かるわよ」

「だま、だますようでわるいからいいー」

「そうなの、残念。じゃあ、もうすぐご飯ができるから、早くリビングに来るのよ。な

くなっちゃうかもしれないから、早めにね」

メイジお姉ちゃんとサンゴは双子だ。鈍感なところが似てるのも当然だ。おちつけ、わたし。ビークール。カラカラと無心でトイレットペーパーを引っ張り、鶴を折った。

エへへへへ。鶴を眺めて癒され、意気揚々とリビングに向かった私は、空の皿を見つけた。

「弱肉強食さ。姉さん。意味は分からないけど」

「ごめんね、アシェリー。ベスったら、あなたの分のお皿を一番に狙って・・・」

「遅いのが悪い。疾風迅雷さ、たぶん！」

「お姉ちゃん、アシュリーの分守りたかったけど。やっぱり、忠告したのにでてこないアシュリーの自業自得かなって」

「メイズ姉ちゃんを、申し訳なさそうにさせた罪は大きいぞ！　姉さん！　謝るんだな！　メイズ姉ちゃんと、ついでに僕に！」

「ちびっこ、俺のでよければやるぞ」

うちの家族、クズしかいないわ。

像

「いってらっしゃーい」

仕事のために、パパやママ、他の兄弟たちが家を出る。十二歳以下の私たちは、仕事がまだできないので、家でお留守番だ。

「ごめんて姉さん、ほんとう、この通り」
「ベス、もっと頭下げんさい」
「いいよ、ミザリーねえちゃん。ありがとう」

家に取り残された私たち三人。ミザリーお姉ちゃん、愚弟、そして私。私たちは、部屋の掃除をしたり、食器を片づけたり、子供ながらできる家事をこなしていた。

「ベスー、そこの雑巾つかって床拭いといてー」
「えー」

「アシュリー、像磨いといてー」
「わかったー」
「僕が磨くの変わろうか？」
「あんたは黙って床磨きんさい」
「ちぇー、楽でいいなあ。姉さん」
「ざまあないわね」

真っ白な布を手に取り、リビングにおいてある大きな机の下へもぐりこむ。

「あ、バールわすれちゃった」
「ほら、姉さん」

かがんだベスの手には、バールが握られていた。

「いいタイミングね」
「しっかりしてよ。五歳だぞ、僕。なんで僕が姉さんをたすけてるのさ」
「そんなこというなら、ワタシだってナナサイよ」

呆れたベスの顔を尻目に、手探りでくぼみを探す。数分し、ようやく見つかったくぼみを、パールとテコの原理を用いて、開けようとする。

「姉さん。机動かさないと開けられないよ」
「……うるさいわね。しってたわ、そのぐらい」
「三度目はあるかな。二度あることは、っていうし」
「うるさい、ばーか！　ガキのくせにナマイキいってんじゃないわ!!　ミザリーねえちゃん！　こっちきてー！」
「どうしたの？　大きな声なんか出して」
「つくえどけるのてつだって！　そっちはこのガキがもつから！」
「はあ、子供だなあ。姉さんは」
「いま洗い物の途中なのにねえ」

大きな机を、脚を引きずりながら動かすと、巧妙に隠された地下室の扉が現れる。パールを使うと、地下室の扉は開いた。コンクリートで作られた階段が現れた。

「はい、懐中電灯。忘れてたでしょ」
「三度目だね」
「さっさとどっかいって！」

二人を無理やりリビングから追い出し、地下室に続く階段を下っていく。

「やっぱりさむいわね」

さきほどまで、うだるような暑さが続いていたが、今は肌寒く感じる。階段は緩やかだが、湿っている。

「１，２，３，４」
「９，１０，１１，１２，１３」
「１９，２０、２１、２２」
「３８，３９，４０，４１」
「５８，５９，６０，６１，６２」
「８１，８２、８３，８４．８５」

「１２３，１２４，１２５，１２６」

「ながい」

すでに階段を下りた数は百を超えた。いまだに地下室にはつかない。

「つかないな、かいちゅうでんとう。いつもどうりだけど」

真っ暗闇の中、壁に手を伝いながら下っていく。何かが足元を通る。何かが私の後ろにいる。何かが私の足にしがみついている。

「あー、おもた」

それから、何百段と下った。手に持っていた懐中電灯はなくなっていて、顔の真横に何かがいた。足元からは、軋んだ音が聞こえてくる。

「ついた」

何かは消え去った。おそらく地下室についたのだろう。なにも見えない。前後左右どちらがどの向きかわからない。前に足を踏み出すと、ガラスを踏んだ音がした。

「あれ、いつのまにおとしたっけ」

ガラスの正体は布に張られた氷だった。おそらく私がなくした白い布だろう。凍えるような寒さによって、濡れた布は凍り付いたのだ。

「よし、ふこう」

さらに寒い方向へと進むと、何かにぶつかった。おそらく像だろう。なにもかも凍りつく空間で、像はいつも濡れている。白い布で濡れをふき取っていく。拭き切ると、いつのまにか地下室の扉の外にいる。

「あら、早いわね。もうおわったの？」

「せっかく扉閉めて出れなくしてやろうと思ったのに」

「ベースー？　床磨きに加えて廊下磨きたい？」

「玉石混合ってやつだね。知らないけど」
「覚えた言葉を使いたがるのは、悪いことではないけど、もう少しちゃんと使いなさい」
「五感で言ってるからいいの。僕将来ラッパーになりたいからこれでいいよ」
「浅はかね」
「あれ、姉さん。懐中電灯とか布は？」
「……」
「忘れたの？　四度目じゃん」
「……」
「いいわ、私がとってくる。アシュリーはゆっくり休んでおいで」
「そんなことする必要は……。うん、姉さん。寝たほうがいいよ。なんてひどい顔」
「ベス、一緒についていってあげて」
「うん……」

ベスが私の手を引っ張ってベットまで連れていく。途中に鏡があった。鏡に映る私の顔は、いつかの誰かの死に顔のようだった。